

学士課程学生調査からみる本学学生の学修： 2016年度上級生調査を中心に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 大阪市立大学大学教育研究センター 公開日: 2019-06-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西垣, 順子 メールアドレス: 所属: 大阪市立大学
URL	https://doi.org/10.24544/ocu.20190625-009

Title	学士課程学生調査からみる本学学生の学修：2016 年度上級生調査を中心に
Author	西垣, 順子
Citation	大阪市立大学大学教育. 16 巻 2 号, p.71-76.
Issue Date	2019-04
ISSN	1349-2152
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学大学教育研究センター
Description	報告 2：第 16 回 FD 研究会報告(2018 年 11 月 1 日開催)：「本学の学修成果保証スキーム・教学 IR の現状と課題(1)：教員・学生調査・教育実践評価から考える」
DOI	10.24544/ocu.20190625-009

Placed on: Osaka City University

学士課程学生調査からみる本学学生の学修 －2016年度上級生調査を中心に－

西 垣 順 子

大阪市立大学 大学教育研究センター 准教授

NISHIGAKI Junko

1. 調査実施の背景と問題意識

大阪市立大学では教育評価の方針を作成しています。概略のみを申し上げますと、ディプロマ・ポリシーに掲げている学修成果の達成状況を直接評価と間接評価を使って評価すること、そして3ポリシーを必要に応じて見直していくという方針です。本文は本学のwebサイトに掲載されています。このうち、間接評価には学生調査、卒業生調査、教員調査、授業アンケートが挙げられていますが、今日は学士課程の学生調査の結果、特に2016年度に行われた上級生調査（2回生以上の学生を対象とした調査）の話をさせていただこうと思います。

この上級生調査は、教育評価の方針のもとにある全学の教育評価計画に従って行われました。調査実施に際しての問題意識をまずは説明させていただきます。実施の2年前の2014年度にも学生調査をやりました。その結果、学士課程の学生は授業には結構真面目に出席しますが、学生が調査をするとか、学生が発表するという授業を履修したいと考える学生は3－4割でした。これを高いと思うか、低いと思うかは様々かと思いますが、もう少しいてくれると嬉しいというところではありまして、本学の学生は能動的なりサーチなどは少し避けがちなのかもしれないという印象を持ちました。

また、本学の学生に限った話ではないですが、自習時間が十分とは言にくいという結果もありました。さらに注目したのがアルバイトの時間です。自習時間が短いとして、それでは何をしているのかといえば、

多いのはアルバイトとサークル・課外活動です。部活やサークルに費やす時間は1年生が多くて、上級生になると減っていくのですが、アルバイトに関しては減らず、むしろ長時間バイトが若干ふえるという結果でした。これはなぜだろうかと思ひまして、それで2016年度にもう一度調査をするに当たって、アルバイトにかかわる項目を若干ふやしたりして分析してみることになりました。

2. アルバイトと学習に関する調査結果

それで結果がどうだったかというと、実は明確な結論を少々出しにくい結果だったのですが、1週間当たりのアルバイト時間と、アルバイトをする目的に関するグラフが章末のスライド1になります。週に12時間以上の長時間のアルバイトをしている人たちが全体で4割ぐらいいます。アルバイトをする目的を示したのがスライド1の右側のグラフですが、主には課外活動が多いという結果にはなっています。学年別にみると2年生でその割合が高くて、4年生は生活費などが比較的ふえていくという結果でした。

他方で、アルバイトの時間と自習時間の間には全く相関がありませんでした。また、アルバイトの目的とアルバイト時間の間にも相関はありませんでした。つまり、学業をするためにアルバイトしないといけないという、そういう切迫感みたいなものと、アルバイト時間と自習時間の間には単純な関係は見出すことができなかったというところ です。

ですが、長時間のアルバイトが学業に全く影響していないかというと、必ずしもそうではなさそうです。章

末のスライド2のグラフですけれども、今回の調査で日ごろの学習活動の頻度を尋ねていました。グラフの左側から順番に、図書館を使うとか学生同士で協働作業をするとかいう、いわゆる普通の通常の学習行動。中央付近が授業を欠席したとか居眠りしたとかというネガティブな授業態度。右側が授業での活動以外の様々な自主的な学習行動の頻度を示しています。週に12時間以上のアルバイトをしている人たちについてみると、通常の学習行動の頻度については他の学生とそれほど変わらないのですが、ネガティブな授業態度の頻度が高いところがあったりしています。また、自主的な学習行動は低く推移しています。

つまり、長時間のアルバイトが学業に影響がないとは言いきれません。けれども、その影響は単純ではないという結果でした。

3. 自習時間と学習成果

ここからは、自習時間の長短と学習行動の関係について、探ってみようと思います。つまり、集中して勉強するのとだらだら長い時間やるのと、どちらがいいのだといった話もあるわけですので、そのあたりのところが調査の結果としてはどう出てくるのかを探ってみました。

章末のスライド3は、先ほどと同じ学習活動の頻度のグラフですが、1週間当たりの自習時間別のものです。そもそも自習時間がどう分布するかといいますと、いわゆる2・6・2の法則と言われるものとはほぼ符合する感じです。つまり、週に2時間未満のほとんどしてない人が2割、逆に11時間以上の自習をしている人が2割、残りの6割が真ん中というのがザックリとしたところですよ。

週に2時間以内、つまりほとんど自習をしていない学生の場合、通常の学習行動の頻度が低く、ネガティブな授業態度の頻度が高く、自主的な学習行動の頻度が低いという、ある意味でわかりやすい結果になっています。

週に11時間以上の学習をしている人たちの場合、通常の学習の頻度はいわゆるボリュームゾーンの人たちとそれほど変わらないのですね。一方で、この人たちは自主的な学習行動の頻度が高くなっています。つま

り、ボリュームゾーンの学生たちは授業には出て、宿題はちゃんとやってというタイプの人たちなのだと思います。それに対して、もっとたくさんの勉強をしている人たちは、それ以外のいろんなところを利用したりしているという傾向があるのかと考えたりしています。

別の角度から見ますと、学修成果の底上げという意味では自主的な学習行動に相当するものに学生をどう引き出していくのが重要になります。小学校や中学校であれば宿題をもっとふやしましょうというのもあり得ると思います。もちろん授業によっては増やす余地はあるのかもしれませんが、やはり本学の自主的に学んでという精神のことも考えますと、学生がみずから学ぼうと思うような場所をどう増やしていくかが課題になるのかなと思っています。

4. 授業の履修希望の状況

ここで、冒頭の前回調査の概略でも触れた「どのような授業の履修を希望するのか」について見てきたいと思います。幾つかの授業のタイプを挙げて、そういう授業を履修したいと思ったか、実際に履修したのかを尋ねる項目がありました。結果は単純と言えば単純な結果で、自習時間が週に6時間以上の人は全てのタイプの授業を履修したいと思い、実際に履修した人が多いです。逆に、ほとんど自習していない学生は全てを履修したくないと答えていまして、真ん中のボリュームゾーンの人たちは特に偏りが無いという結果でした。

あらゆる形の授業というのはそれぞれに目的があって、目的に応じていろんな形をとって展開されていることを考えますと、意欲的な学生が全て履修したいと思うというのは納得のいくところかなと思います。

章末資料のスライド4は、本学は研究大学でディプロマ・ポリシーの中にも批判的思考力とか創造的思考力とかいった内容を入れているというところから考えて、特に大事と思われるタイプの授業についての結果です。例えば学生が文献や資料を調べる授業とか、自分の考えや研究を発表する、議論をするといったタイプの授業です。一番左側が履修をしたいと言って実際に履修をした学生で、次は履修を希望はしたけど履修

しなかった、それから履修したくなかったけれど履修はしたという順の回答者の割合です。先ほどから申し上げているように、6時間以上の自習をしている学生は意欲的に履修をしたいと考えている学生が4割を超えるという結果でした。

同じタイプの授業の履修希望状況について、学年別に比較をしてみたのがスライド5です。全体として履修を希望する割合が2年生から3年生になると増えていきます。3、4年生になると4割強になり、2014年度の調査とはほぼ同じ傾向の結果になっていました。実は2年前の前回調査との比較も試みたのですが、この2年間での変化は「変化があったとは言い切れない」という微妙な結果になりました。統計的に検定してみると実は、「履修を希望する」はほとんど増えてないのですが、「履修した」が有意に増えていたのではありません。ただ、では前回から何が減ったのかというと、前回は無回答とか無効回答が多かったんです。今回はそれらが減りました。つまり「微妙な結果」なのです。少なくともネガティブな方向への変化はないとは言えると思うのですけれども、ポジティブに変化したともいえないという結果でした。

5. 卒業後のキャリアに関する意識

少し話が変わりますが、前回調査ではあまり丁寧に分析できなかった、卒業後の進路への準備や将来展望についてみてみたいと思います。卒業までにどのようなことを経験したいかと尋ねますと、けっこう安定的に男女差が出てきます。ですが、単に男女差が出ただけでは、それは学部の違いなのか、男女の違いなのかはわかりません。そこで文系4学部と理学部・工学部で比較していきたいと思います。

調査票で尋ねた質問の内容は次の通りです。まず卒業後の進路希望について、「民間企業」「公務員」「大学院」などの10ほどの選択肢から考えているものを全部選んでくださいという聞き方で尋ねました。ついで将来展望、卒業後の将来の見通しについて、「見通しがない」、「見通しはあるけれども何をすべきかわからない」、「見通しがあって、何をすべきかわかっているが実行していない」、「見通しがあり何をすべきかわかっており実行もしている」の4つから1つ選んでも

らいました。

それから、「卒業までに経験したいこと」と「現在の学習行動」についても聞いています。まず将来展望への回答ですが、章末のスライド6にあるように、「将来への見通しがない」という回答をする割合は、文系に関しては男子も女子も徐々に減っていきませんが、理工系では男子は減らないという結果になっています。他方で理工系の女子は、文系ほどではありませんが、4年生になると減っていきます。他方、「将来に向けてすべきことを実行している」という人は、女子は文系でも理系でも4年生にかけて増えていきますが、男子のほうは、文系、理系ともにそれほど増えません。ちなみに理工系は、大学院への進学率が高いので、このような結果は全国的な傾向です。将来のことは少し先送りという傾向があるのではないかと言われています。ただ、男性と女性では異なる結果が出てきたというのが、今回の調査結果になります。

それから章末のスライド7を見ていただきたいのですが、グラフが小さくて申しわけありませんが、卒業するまでに経験したいこと、身につけたいことについて尋ねた結果です。文系・理系で違いが出なかったものですから、学年別と男女別のみの結果を示しております。全体として女子は、「知識を身につけたい」「職業意識を身につけたい」「資格を身につけたい」という、学修成果に当たるものを強く希望しています。他方で、そういうところに到達するためにはプロセスがあるわけですが、大学が提供しているプロセスである「プロジェクト型の授業」であったりとか、「ディベートやプレゼンの訓練」であったりとか、そういうものに関する経験の希望は男女で違いがないという結果でした。

また、女子の希望が比較的高かったのは、章末スライド7のグラフの右側のあたりです。特に3年生がそうですが、「卒業生に進路相談がしたい」「学外の社会人と話がしたい」「教員に相談したい」など自分の将来について相談をしたいという希望が女子学生に強く出ていました。

そこで、相談ではなく授業ですが、キャリアデザインに関わる授業の履修希望について改めてみてみます。章末のスライド8に、「仕事に役立つ知識やスキ

ルを学ぶ授業」「将来とのかかわりについて考える授業」を、履修したいかどうかを聞いた問いへの回答を、学年別に示してあります。前述の「学生が研究する授業」などとは違いまして、これらの授業は実は2年生のころから結構希望者が多いのです。

一方でこの調査結果では、「希望はしているが履修はしていない」という人も結構（2－3割）います。ただ、実は大学教育研究センターが今までにも各学部を訪問させていただいてカリキュラムのことを聞かせていただいたりしているのですけれども、こういうタイプの授業は結構やられているのですよね。中には必修になっているところもあるのです。卒業生の方が来て話をしてくださる授業などあります。少し不思議な結果といえば不思議な結果になっています。学生は案外わかっていなくて、何となく聞いてしまっているのかと思ったりもしました。このあたりのところはもう少し検討を要する課題かと思います。

6. まとめ

今後の調査のあり方も含めた検討課題の整理とまとめをしたいと思います。

まず、学生調査というのは教育成果の評価の一環です。PDCAサイクルでいうところのCに相当します。個人的に最近、「仮説生成としての学生調査」「仮説生成としての評価」という言葉を使っています。「仮説検証」という意味合いで学生調査を使ってしまうと、いろんな弊害や数値のひとり歩きが生じる危険があるかと思います。一方で、私たちが本学の教育をこれからどうしようかと考えていくときに、「筋のよい仮説」を立てて考えていく必要があるわけで、そのためには有効な手がかりではないかと思っています。

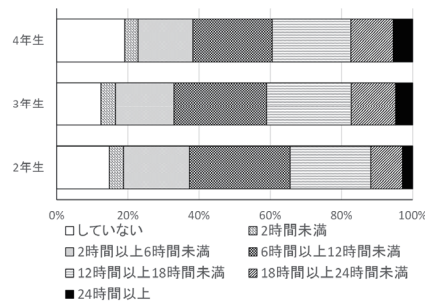
また本日、幾つか結果をもとに本学の学生の学びの実態についての推測や仮説を紹介させていただきました。2回の調査をやりましたので、日ごろの学生の学習行動や学習態度に関しては、傾向はだいぶ見えてきたかなとは思っております。2－3年先に次に調査をするときには、項目の設計を新しくする部分は新しくするなど考えないといけないことが、いくつかあるかと思っています。

1つは、今回の調査はAP事業の期間中のものでは

ありますが、採択の通知が来たのが8月で、調査の準備は6月、7月からやっていたので、当然のことながらOCU指標やラーニングセンターのことは聞いていないわけです。そういう取り組みがどの程度の効果があったかということは次の調査で調べていくことになります。

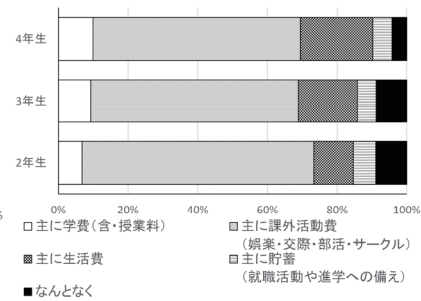
また、授業の履修希望や卒業までに経験したいことについては、概ね傾向が見えてきたのですが、その背景に何があるのかということまでは十分わかっていません。自習時間が少な目であるところの人たちをどうするのかという問題にも、そのあたりのことを探った結果を生かしていく必要があるかと思っております。いろいろ、これも尋ねないと、あれも尋ねないと…となると、調査票がどんどん厚くなっていきます。2回目までは前回調査の踏襲で基本はやっていたのですが、ある程度は傾向が見えてきたかなというところはスリムにするなどして、次回調査は調査票の内容についても工夫が必要かなと思っているところで

図1. 1週間当たりのアルバイト時間



2年生	622名
3年生	707名
4年生	674名

図2. アルバイトをする目的

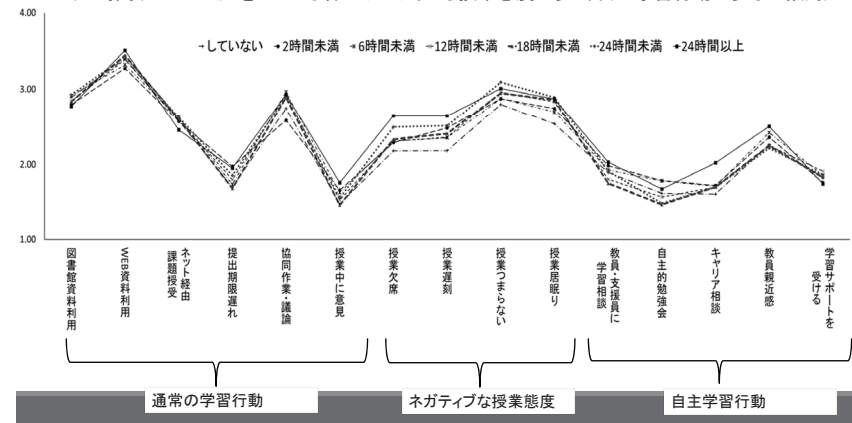


1. 週に12時間以上のアルバイトが約4割にのぼる
2. 2年生は課外活動のためのアルバイトが、4年生は生活費のためが比較的多い
3. アルバイト時間と自習時間の間に相関はなかった
4. アルバイト目的とアルバイト時間の間に相関はなかった

1

図3. アルバイト時間別の学習行動

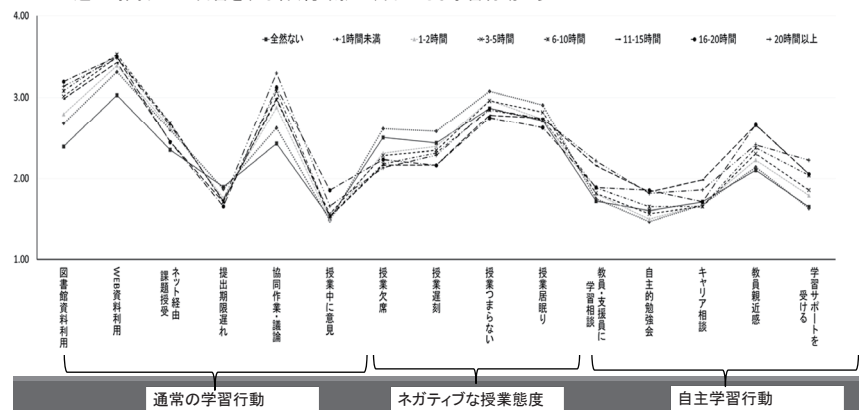
(12時間以上のバイトをしている者はネガティブな授業態度が多く、自主学習行動が少ない傾向)



2

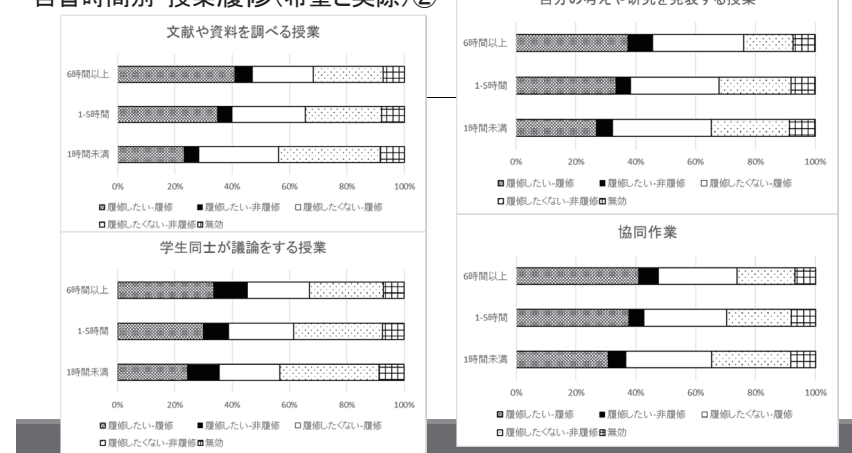
図4. 自習時間別の学修行動

- ・ 週2時間未満(約2割)は通常の学習行動・自主的学習行動がともに少なく、ネガティブな授業態度が多い
- ・ 週11時間以上の自習をする者(約2割)は、自主的な学習行動が多い



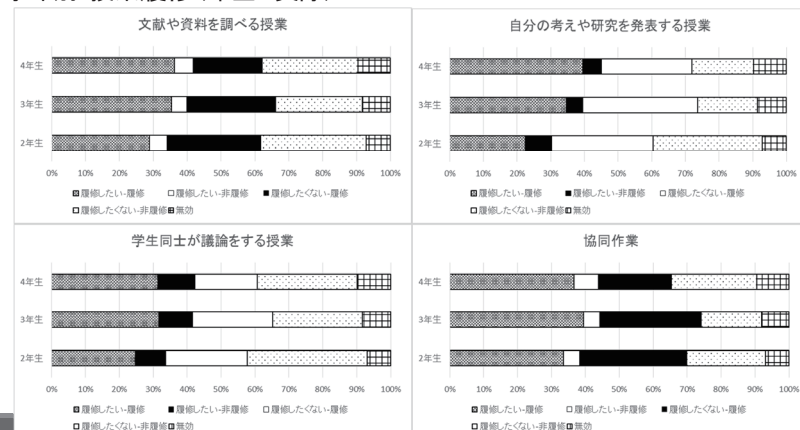
3

自習時間別・授業履修(希望と実際)②



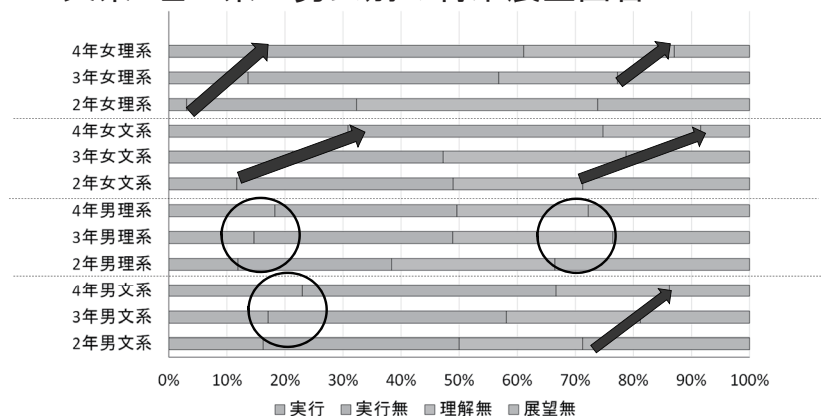
4

学年別・授業履修（希望と実際）



5

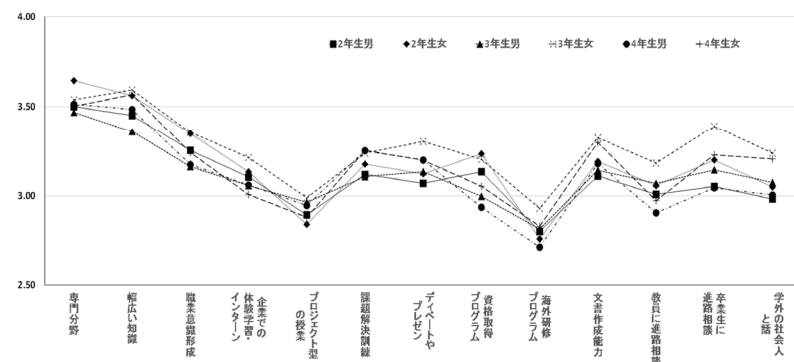
文系・理工系×男女別の将来展望回答



6

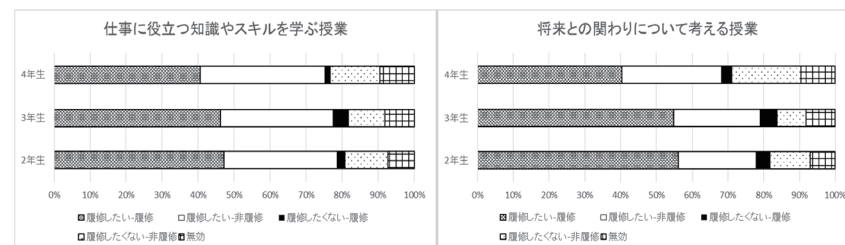
男女別の卒業までに経験したいこと

- 女子は、知識技能や資格などの学修成果を強く望み、卒業生など学外者との対話を希望



7

学年別・授業履修（希望と実際）②



- 仕事や将来について考えたり学んだりしたいという希望は2年生から多い
- 「将来との関わりについて考える授業」は各学部で比較的多く展開されているはずだが…（周知不足もあるのか？）

8